

兵庫県加古川市方言の「ヨル」「トル」について

著者	中尾 亜有美
出版者	長野県ことばの会
引用	ことばの研究 11: 1-12 (2000)
発行年月日	2000-10-21
URL	http://hdl.handle.net/10091/00022430

兵庫県加古川市方言の「ヨル」「トル」 について

中尾 亜有美*

1 はじめに

兵庫県加古川市方言における結果継続をあらわす表現として「トル」がある。

窓開けトー

この場合、窓はもうすでに開いている。では、窓を開けているところを見て言う動作継続相の場合にどうかというと、

窓開けヨー

と言う¹。このように「ヨル」と「トル」はアスペクト的に使い分けられている、と一応考えられるのだが、動詞によっては、動作継続相において「ヨル」だけでなく「トル」もいえる場合がある。

太郎が遊んどー

太郎が遊びヨー

これらは、どちらも太郎が今まさに遊んでいる最中であることを示しており、アスペクト的には同じ意味（動作継続）であると考えられる。しかし、果たしてこの二つの表現は全く同じだといえるのだろうか。

小論では、この「ヨル」「トル」の違いについて考察をする。

*なかお・あゆみ／信州大学人文学部 1999 年度卒業生。

¹「ヨー」「トー」はそれぞれ「ヨル」「トル」の実現形である。よって、以下に上のような発話を示す場合以外は「ヨル」「トル」と記述する。

2 動作継続相に「ヨル」「トル」の両者があらわれる動詞について

先に述べたように、接続する動詞によっては動作継続相に「ヨル」のみならず「トル」もあらわれる。ここでは、このときの「ヨル」と「トル」の違いについて考察する。

2.1 発話者と動作主との距離による「ヨル」「トル」の使い分け

2.1.1 調査(1) 発話者と動作主との物理的距離による「ヨル」「トル」の使い分け

動作継続相における「ヨル」「トル」の違いについて、筆者の内省で考えてみたところ、「ヨル」は近くでその行為を観察しており、「トル」はその行為を大まかに全体として捉えているように思えた。つまり、発話者と動作主との物理的距離の遠近の違いによって「トル」「ヨル」が使い分けられているのではないかと考えたのである。そしてその仮説を証明するために調査(1)を行なった。

調査対象とした動詞は、九州方言研究会編 1997『西日本諸方言のアスペクトの地域差に関する報告書』に出てくる動詞を用いた。これを選んだ理由として、この調査では、動作継続相における「ヨル」「トル」の使い分けに、動詞のアスペクト性が関わらないことを証明したかったからである。『西日本諸方言…』に採用されている動詞は、工藤 1995 が示した動詞のアスペクト性による動詞の分類から偏らないように各種の動詞が取り出されている。この調査ではさらにその中から、動作継続相において「ヨル」「トル」の両者があらわれうる動詞全てを調査対象とした。調査対象とした動詞は次の通りである。

読む、見る、遊ぶ、歩く、降る、泣く、作る、飲む、叩く、飛ぶ

そしてそれぞれの動詞について発話者と動作主との物理的距離が遠近という二つの場面を想定した文を作成し、「ヨル」「トル」のどちらがふさわしいかを調査した。インフォーマントは、A (27 歳・男性)、B (22 歳・男性)、C (23 歳・男性)、D (25 歳・男性)、E (22 歳・男性)、F (22 歳・女性)、G (24 歳・女性)、H (22 歳・女性)、I (25 歳・女性)、J (筆者・22 歳・女性) の男女 5 人ずつ、計 10 人であり、筆者を含めてすべてネイティブである。

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J
目の前で太郎がしかめっ面で何か書きこみながら本を読んでいる	○	○	○	○	○	○	●	●	○	○
あそこで太郎が本を読んでいる	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
目の前で太郎が夢中になって食い入るようにテレビを見ている	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
あそこで太郎がテレビを見ている	●	●	○	●	●	●	●	●	●	●
目の前で太郎が砂場で大きな山を作って遊んでいる	○	●	○	○	○	○	○	○	●	○
あそこで太郎が遊んでいる	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
目の前で太郎が水溜りの中をしぶきをあげながら歩いている	●	○	○	○	○	○	○	●	○	●
あそこで太郎が歩いている	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
目の前で雨が叩きつけるように降っている	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
外で雨が降っている	●	●	●	●	●	○	●	●	○	●
目の前で太郎が鼻水をたらしながら声をあげて泣いている	●	○	●	○	●	○	○	●	●	●
あそこで太郎が泣いている	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
目の前で太郎が全身粉だらけになりながらケーキを作っている	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
あそこで太郎がケーキを作っている	○●	○	●	●	○	○	●	●	●	○●
目の前で太郎がゴクゴク喉を鳴らしながらビールを飲んでいる	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
あそこで太郎がビールを飲んでいる	●	○	●	●	○	●	●	●	○	●
目の前で太郎が一生懸命おじいちゃんの肩を叩いている	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
あそこで太郎がおじいちゃんの肩を叩いている	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
紙飛行機が頭の上をゆらゆら飛んでいる	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
あそこで紙飛行機が飛んでいる	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●

表 1: 発話者と動作主との物理的距離の遠近によるヨル/トル差

[ヨル=○、トル=●]

表1を見ていただきたい。このような調査の結果、インフォーマントによって違いはあるものの、大体の動詞について物理的距離の近い設定の文では「ヨル」、遠い設定の文では「トル」という結果がでた。よって「トル」「ヨル」の使い分けは、発話者と動作主との物理的距離の遠近によるということが証明されたといえる。

しかし、表1を見て分かるようにインフォーマントによっては距離の遠近に関わらず「ヨル」しかあらわれない動詞や、反対に「トル」しかあらわれない動詞がある。筆者自身(J)も「歩く」「泣く」という動詞では物理的距離の遠近に関わらず「トル」と回答している。では、それらの動詞について、「ヨル」は使用しないのかということそうではない。動作主が親しい人物であれば「歩きヨー」「泣きヨー」といえる。このことから、動作主と発話者の物理的距離だけではなく、心理的距離によっても「ヨル」「トル」が使い分けられているのではないかと考え、調査(2)を行なった。

2.1.2 調査(2) 発話者と動作主との心理的・物理的距離の遠近による使い分け

調査対象とした動詞は調査(1)の対象とした動詞から「降る」「飛ぶ」を除いたものである。これらの動詞は、動作主が人であることが考え難いために対象からはずした。よって調査対象とした動詞は以下である。

読む、見る、泣く、作る、飲む、叩く、遊ぶ、歩く

これらの動詞に対してそれぞれ以下のa、b、c、dの場合を設定し、「ヨル」「トル」のどちらがふさわしいかを尋ねた。インフォーマントは調査(1)と同じA～Jの男女各5人である。

- a. 目の前で親しい人物がその動作を行なっているとき。
- b. 遠くで親しい人物がその動作を行なっているとき。
- c. 目の前で知らない人物がその動作を行なっているとき。
- d. 遠くで知らない人物がその動作を行なっているとき。

表2を見て分かるように、b、cの回答はインフォーマントによって、かなりゆれがある。それは物理的距離の遠近に対する認識の違いというよりは、

	a ヨル	a トル	b ヨル	b トル	c ヨル	c トル	d ヨル	d トル
読む	10	0	3	7	2	8	0	10
見る	10	0	1	9	3	7	0	10
遊ぶ	10	0	0	10	3	7	0	10
歩く	10	0	0	10	2	8	0	10
泣く	10	0	0	10	1	9	0	10
作る	10	0	4	6	4	6	0	10
飲む	10	0	4	6	5	5	0	10
叩く	10	0	2	8	2	8	0	10

表 2: 発話者と動作主との心理的・物理的距離の遠近によるヨル/トル差
[数字は人数]

心理的距離の遠近に対する認識の違いによると考えるのが自然であろう。「遊ぶ」「歩く」「泣く」に関しては心理的距離が近くても、物理的距離が遠ければ、全員「トル」と回答しており、他の動詞に比べて「トル」があらわれやすいという傾向がある。このようなゆれはあっても、aの心理的・物理的距離ともに近い場合は「ヨル」、dの心理的・物理的距離ともに遠い場合は「トル」というのはインフォーマント全員が一致しており、これは動かしがたい事実である。

また、調査では除いた「降る」「飛ぶ」についても筆者の内省で考えてみる。同じ「降る」のでも、ただの「雨」と、おかげで大嫌いな運動会が中止になる「雨」とではやはり後者の場合に「ヨル」があらわれやすいし、同じ「飛ぶ」のでも、ただの「鳥」と、ペットの「ピーちゃん」では、やはり後者に「ヨル」があらわれやすい。このように、加古川市方言における動作継続相の「ヨル」「トル」の使い分けには発話者と動作主との心理的・物理的距離が関係しているということが、これらの調査結果より言えそうである。

2.2 観察の精粗差としての「ヨル」「トル」

以上「ヨル」「トル」の使い分けは発話者と動作主との心理的・物理的距離によると述べたが、テレビなどの媒体を通したものに対するそれに関しては通用しない。たとえばテレビのニュースで札幌の大雪の中継をしているとする。そのとき、「札幌で雪が降っている」という意味のことをいうとき、「札幌で雪降りヨー」という。先の解釈に従えば、物理的にも心理的にも遠い札

幌で「降っている」のだから「トル」を使うべきところだが、「トル」よりも「ヨル」の方が自然である。これはなぜだろうか。

自宅のテレビを見ている場合なら、テレビが自分の家の所有物だということで心理的距離が近くなり、また物理的距離についても、テレビとの距離と考えれば近いといえる。しかし、もしそれを電気店のテレビで見ても「ヨル」というし、テレビから遠く離れて見たときでも「ヨル」という。ではなぜかという、普段自分の目の前で起こっていることを述べる場合は、周りにある様々な事象の中からあるひとつを取り出しているのに対して、テレビなどの媒体を通したものというのは、もうすでにある一部を切り取った形で私たちに見せている。「雪が降っている」ということを言わんが為に、その部分を切り取って見せているのである。それはつまり、近くで動作・作用を観察しているのと同じことであり、そう考えれば「ヨル」を使用することにも納得できる。

そうすると、発話者の動作主との物理的距離によって「ヨル」「トル」が使い分けられているという説明は正確ではない。発話者と動作主との実際の物理的距離が遠くても、観察がよくできる状態であれば「ヨル」があらわれる。つまり、観察が細かければ「ヨル」、粗ければ「トル」があらわれるのである。また、心理的距離による使い分けについても観察の精粗によって説明できる。心理的距離が近ければ「ヨル」、遠ければ「トル」ということはつまり、心理的距離が近ければ遠慮せずにじっくりと観察することができるので「ヨル」、遠ければじっくり観察しては失礼になるので観察が大まかになり「トル」があらわれるということになる。

先に、動作継続相における「ヨル」「トル」の使い分けは、発話者の動作主に対する心理的・物理的距離によると考えたが、動作・作用に対する発話者の観察の精粗による使い分け、と考えた方がよいと思われる。心理的距離や物理的距離の遠近は、その動作・作用に対する観察がしやすいか、しにくいという環境に影響を与える要素なのである。

2.3 時間の流れの中での「ヨル」「トル」の使い分け

2.3.1 調査(3) 辰浜 1977 による動作起点からの距離による「ヨル」「トル」の使い分けに対する加古川市方言での検証

兵庫県相生市方言の動作継続相における「ヨル」「トル」の違いについて、辰浜 1977 では、次のようなことが述べられている。

トーで進行を表わすことができるのは、いずれも動作・作用がかなり以前から続いているときに限られる。これに対して、ヨーは動作・作用が始まったばかりの頃と、その後の動きの持続の状態を表わす。

このような「ヨル」「トル」の違いについて、加古川市方言でもいえるかどうか以下の調査(3)で検証する。調査対象とした動詞は、調査(1)と同じである。

これらの動詞それぞれについて次のような場合を設定し、「ヨル」「トル」のどちらがふさわしいかを回答した。

- 動作・作用の起点から見ていて、動作・作用が始まったばかりの場合。
- 動作・作用の起点から見ていて、動作・作用がかなりの時間続いている場合。

インフォーマントは調査(1)(2)と同じく A~J の男女 10 人である。

表 3 のように、大体の動詞について先の論どおりに動作・作用の起点からの時間的距離が近ければ「ヨル」遠ければ「トル」という結果が出た。しかし、例外もある。インフォーマントによっては「作る」「飲む」では、起点からの距離に関係なく「ヨル」があらわれている。これはなぜか。

「作る」ということは当然何かが出来ていくということであり、「飲む」ということはそれによって飲まれているものの量は減っていく。つまり、どちらの動詞も常に変化があり、その変化を捉えていくには、観察を要するので「ヨル」があらわれやすいのではないか。

もうひとつの例外として「飛ぶ」がある。インフォーマントによっては起点からの時間的距離が近い場合でも「ヨル」だけでなく「トル」もあらわれて

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J
(読み始めたばかりで) 太郎が本を読んでいる (長時間読み続けていて) 太郎が本を読んでいる	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
(見始めたばかりで) 太郎がテレビを見ている (長時間見続けていて) 太郎がテレビを見ている	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
(遊び始めたばかりで) 太郎が遊んでいる (長時間遊び続けていて) 太郎が遊んでいる	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
(歩き始めたばかりで) 太郎が歩いている (長時間歩き続けていて) 太郎が歩いている	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
(降り始めたばかりで) 雨が降っている (長時間降り続けていて) 雨が降っている	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
(泣き始めたばかりで) 太郎が泣いている (長時間泣き続けていて) 太郎が泣いている	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
(作り始めたばかりで) 太郎がケーキを作っている (長時間作り続けていて) 太郎がケーキを作っている	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	○●	○	●	●	○	○	●	○	●	○
(飲み始めたばかりで) 太郎がビールを飲んでいる (長時間飲み続けていて) 太郎がビールを飲んでいる	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	●	○	○	●	○	○	●	●	●	●
(叩き始めたばかりで) 太郎が祖父の肩を叩いている (長時間叩き続けていて) 太郎が祖父の肩を叩いている	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
(飛び始めたばかりで) 紙飛行機が飛んでいる (長時間飛び続けていて) 紙飛行機が飛んでいる	○●	○	○	○	○	○●	○	○●	○	○
	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●

表 3: 時間の流れの中でのヨル/トル差 [ヨル=○、トル=●]

いる。これはなぜだろうか。この調査で筆者は動作起点からの時間的距離が短ければ「ヨル」だけを回答している。しかし内省で考えてみると、動作主が紙飛行機ではなく航空機だとしたら「ヨル」だけでなく「トル」もいえる。このことから分かるのは、「飛ぶ」ことに対する注目度の違いである。紙飛行機なら作り方を失敗すればすぐ墜落してしまうので、飛ぶかどうかということに対する注目度が高い。よって、観察を要し「ヨル」があらわれる。その点航空機は飛ぶのが当然であるから、飛ぶことに対する注目度は低く、よって「トル」があらわれるのであろう。

このような例外はあったが、大体の動詞において、動作・作用の起点からの時間的距離が近ければ「ヨル」、遠ければ「トル」という使い分けは、加古川市方言にもあてはまるといえる。

2.4 主観・客観的観察による「ヨル」「トル」の使い分け

先に動作・作用の起点からの時間的距離が近ければ「ヨル」、遠ければ「トル」であると述べたばかりであるが、例外がある。たとえば「5分前から雨が降っている」というとき「5分前から雨降っトー」という。先の論に従えば、たった5分前からなのだから「ヨル」があらわれそうなところである。「昨日からずっと雨が降っている」というときは、「昨日からずっと雨降っトー」となり、これは「昨日からずっと」なのだから、「トル」があらわれて先の論にも合う。これらの例を考え合わせると、「5分前」や「昨日からずっと」などのように客観的な表現には「トル」があらわれるように思える。また、先の例文に「しとしと」「まるで泣いているかのように」という主観的な修飾語を入れてみると、「5分前からしとしと雨降りヨー」「昨日からずっと泣いとーみたいな雨降りヨー」のように、どちらも「ヨル」があらわれる。これらのことから、客観的な表現には「トル」が、主観的な観察には「ヨル」があらわれる、つまり主観的観察か、客観的観察かということによって「ヨル」「トル」の使い分けられていることになる。

しかし、考えてみれば主観的な観察ということはその動作・作用に対する注目度が高く観察が細かい状態であり「ヨル」があらわれるのも当然である。また「昨日からずっと」や「5分前」などという客観的表現を伴う観察の場合、観察対象が動作・作用そのものよりも、時間などの客観的事実にあるといえる。よって、動作・作用そのものに対する観察は粗く、「トル」があらわ

れる。このように考えれば、発話者の、その動作・作用に対する観察の精粗によって説明できる。

また先項の動作・作用の起点からの時間的距離による使い分けについても、説明できる。動作・作用の起点からの時間的距離が短いということは、違う状態からその動作・作用に移ったばかりで変化があり、いわばその動作・作用が安定していない状態である。よって、観察を要し「ヨル」があらわれる。一方、起点からの時間的距離が遠いということは、その動作・作用が長時間続いており、同じ状態のまま変化が少ない。そうなる则細かな観察は必要なくなり、「トル」があらわれるのである。

このように、動作・作用の起点からの距離の遠近、主観的・客観的観察、いずれも直接「ヨル」「トル」の使い分けに関係しているのではなく、2.1. と同じく観察の精粗によって使い分けられていることが明らかになった。

2.4.1 観察の精粗による「ヨル」「トル」の使い分けの相生方言での検証

これまでに、辰浜氏のいうような動作継続相における動作・作用の起点からの時間的距離による「ヨル」「トル」の使い分けが、加古川市方言でもいえるのかということを検証した。その結果、加古川市方言における「ヨル」「トル」の使い分けは、2.1. でも述べたとおり発話者の観察の精粗によるのであり、動作・作用の起点からの時間的距離はその観察の精粗に影響を与える要素なのである。

そこで、相生方言の「ヨル」「トル」の使い分けについても、加古川市方言と同じく観察の精粗によって説明できるのかを検証するために、ここで辰浜 1977 より例文をいくつか挙げる。

1. アカチャンガアルッキョー（赤ちゃんが歩き始めたばかりの状態）
2. ヒガモエヨー（火が燃え始めたばかりの状態）
3. エークツコーテモーテズットアルイトー（良い靴を買ってもらって、ずっと歩いている。以前から歩きつづけている状態）
4. ヤマカジガヨーモエトー（山火事がよく燃えている。以前から燃え続けている状態）

1,2 は「ヨル」、3,4 は「トル」があらわれている。1 の赤ちゃんが歩き始めたばかりというの、2 の火が燃え始めたばかりというの、動作・作用が始まったばかりで不安定な状態である。よって、動作・作用に対する注目度は高くなり「ヨル」があらわれる。3 も 4 も長時間歩き続けたり、燃え続けた

りしており、変化が少なくほぼ同じ状態が続いているといえる。よって動作・作用に対する注目度は低く、観察も粗くなり「トル」があらわれる。

実際に相生市で調査を行なってみなければ確かなことはいえないが、これらの例文で見える限りでは、相生市方言においても加古川市方言と同じく、発話者の動作・作用に対する観察の精粗によって「ヨル」「トル」が使い分けられているといえそうである。

3 動作継続相に「ヨル」「トル」の一方しかあらわれない動詞について

2章では、動作継続相に「ヨル」「トル」の両者があらわれうる動詞を対象として考察を行ない、その結果観察の精粗によって「ヨル」「トル」が使い分けられていることが分かった。そこで、その観察の精粗ということによって、動作継続相に「ヨル」あるいは「トル」しかあらわれない動詞についても説明が可能であるか、ここで検証する。

3.1 動作継続相に「ヨル」しかあらわれない動詞

「死ぬ」という動詞は、動作継続相に「ヨル」しかあらわれない。いくら観察が大まかだったとしても「死にかけている」ということは「死にヨー」としかいえない。「死んどー」となると、もうすでに死んでいる状態が続いていることをいう。このように「ヨル」でしか動作継続相をあらわせない動詞は少なくない。たとえば「干す」「切る」「開く」などである。では、なぜこれらの動詞の動作継続相には「ヨル」しかあらわれないのだろうか。

これらの動詞は先に述べた「作る」のように、変化が起こる動詞である。「死ぬ」の動作継続相「死にヨー」なら、死に向かって近づいていることを表わす。変化があるということは、観察を要するということである。よって「ヨル」があらわれ、観察が粗い場合にあらわれる「トル」はそぐわないのである。

3.2 動作継続相に「トル」しかあらわれない動詞

たとえば、「太郎はいつも恋人のことを思っている」というとき、「太郎はいつも恋人のこと思っトー」という。いくら太郎と親しくても、やはり「トル」である。では、この動詞の動作継続相において「ヨル」があらわれるこ

とはないのかということ、自分が動作主である場合のみいえる。たとえば「わたし五時までにはそっちに行こうと思ひヨル」のようにいえる。しかし、この場合もどちらかということ「トル」のほうが自然なように思える。では、どうしてこの動詞には「ヨル」がそぐわないのだろうか。

「思う」という動詞の性質からいって、形となつては見えないということがある。動作といっても心の中のことなので、本人以外からは認識しにくく、主語が一人称の場合しか「ヨル」があらわれないことにも納得がいく。よって、観察がほぼ不可能な動詞であるので「ヨル」があらわれることが極めて少なく、大まかな観察にそぐう「トル」があらわれるのであろう。

このように動作継続相に「ヨル」もしくは「トル」しかあらわれない動詞についても観察の精粗による説明が可能である。

4 おわりに

これまでの「ヨル」「トル」研究はアスペクト的な側面に注目したものがほとんどであった。しかし、本稿では、加古川市方言（および相生市方言）では「ヨル」「トル」のアスペクト的側面以外に、発話者のその動作・作用に対する観察の精粗という違いがある、ということを明らかにした。

引用および参考文献

1. 井上文子（1998）『日本語方言アスペクトの動態－存在形表現形式に焦点をあてて－』秋山書店
2. 奥田靖雄（1977）「アスペクトの研究をめぐって－金田一的段階－」『（宮城教育大）国語国文』8
3. 奥田靖雄（1978）「アスペクトの研究をめぐって」『教育国語』53、54
4. 九州方言研究会（1997）『西日本諸方言のアスペクトの地域差に関する報告書』鹿児島大学法文学部木部暢子研究室
5. 金田一春彦（1950）「国語動詞の一分類」『言語研究』15
6. 工藤真由美（1995）『アスペクト・テンス体系とテキスト－現代日本語の時間の表現－』ひつじ書房
7. 工藤真由美（1998）「西日本諸方言と一般アスペクト論」『月刊言語』7-98
8. 辰浜マリ子（1977）「相生方言のアスペクト－「居る」・「て居る」について－」『都大論究』14
9. 丹羽一彌（1977）「トル・ヨル考」『東海学園国語国文』11